

色が語る

いにしへの技と心

色とは、反射した光を人の目を感じ取った視覚情報です。五感の中でも視覚は、圧倒的な影響力を持っており、色は人間社会や文化の形成において重要な役割を担ってきました。本展示会では、色からみえてくる技術の発展や他地域との交流、色に込められた人々の思いを考古学の資料から紹介します。



丹塗りの土器 (宮崎市 西片瀬原遺跡)
じゃあく
邪悪なものを封じ込め、災いを防ぐとされた赤色は、祭祀に関する道具や装身具に塗られました。



黒く磨かれた土器 (高千穂町 陋内遺跡)
縄文時代の終わり頃には、磨いて光沢を出した土器の表面にススを付着させた黒色の土器が登場しました。



青色のガラス玉類 (小林市 大萩遺跡)
青色のガラス玉は交易によってしか入手できないという希少性から、権威の象徴としての役割を担いました。



緑・赤・黄色の美しき玉類 (西都市 西都原111号墳)
カラフルなガラス玉や、緑色の碧玉製管玉は、古墳に葬られた首長を飾っていました。



白く輝く腕輪 (国富町 大坪地下式横穴墓)
南海でのみ生息するゴホウラを材料とした純白に輝く貝輪は、手にした権力者の威厳をさらに高めたと思われます。



同素材で復元された八鈴鏡 (日向市 鈴鏡塚古墳)
金属器は色よりも輝きを発するという点が重視され、宗教的な儀式のほか、支配者層の権威を示すために用いられました。

平成29年度 展示会情報

特別展

もろかたのきみ かつらぎ
日向諸県君と葛城氏

2017(平成29)年7月15日(土)～9月10日(日)



男狭穂塚・女狭穂塚

国際交流展

すい
台湾鉄器文化の粋

新北市十三行遺跡と人びと

2017(平成29)年
10月7日(土)～
12月3日(日)



人面土器
(台湾中央研究院所蔵、
新北市立十三行博物館所蔵)

企画展II

とよ ひむか
豊と日向 ～日出る国の考古学～

2018(平成30)年1月13日(土)～3月18日(日)



土製聖人像 (宮崎県埋蔵文化財センター所蔵)